

## JICA ジョモケニヤッタ農工大学 (学士課程) プロジェクト参加報告

米 屋 武 文

### The Report of Jomo Kenyatta University of Agriculture & Technology (Undergraduate Programme) Project

YONEYA Takefumi  
(食品加工学研究室)

#### はじめに

平成7年8月1日より10月21日までの3か月弱、アフリカはケニア共和国のジョモケニヤッタ農工大学に国際協力事業団 (JICA) 短期専門家として派遣された。主たる任務は、酪農製造学の講義および実験実習を行なうことと、カウンターパートを勤めてくれた現地の教官候補者の研究指導である。なにしろ、筆者にとって初めてのアフリカであった。英語での授業は未経験な上、エイズやエボラ出血熱、マラリアなどの流行病に加えて治安の悪さといった問題を情報として日本で見聞きしていたので、躊躇もあった。しかしながら、静岡県立大学が世界に開かれた大学を志向していることと、自分の知識が少しでもアフリカの地において役に立てることができるのなら本望と思い参加させて頂いた次第である。

#### ケニアの概況

ケニア (正式名はケニア共和国) は、図1に示す通り、アフリカ東部の赤道直下に位置しており、58万km<sup>2</sup> (日本の1.5倍) の国土に2,500万人 (1993年) の人が住んでいる。赤道直下という酷暑を連想しそうだが、中部一帯は標高1,700m前後の高原であるため、平均気温10~28 というしのぎやすさで、手もとの旅行ガイドブックには「1年中夏の軽井沢」と書いてある。

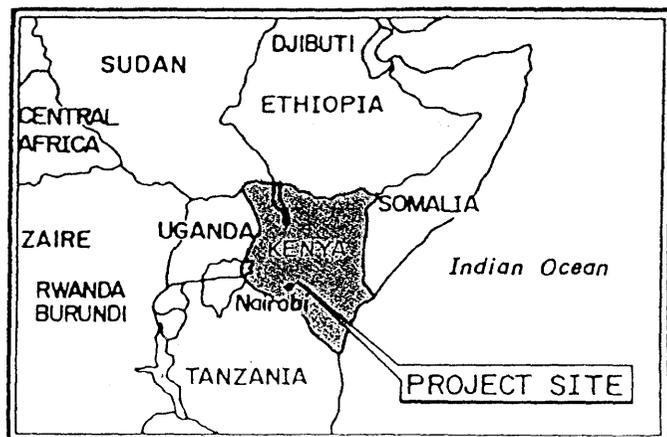


図1 ケニア共和国と周辺国

## ジョモケニヤッタ農工大学

本学は1977年、ケニア政府からの協力要請にもとづいて、日本政府の無償資金協力によって建設されたケニアの国立大学では5番目の一番新しい大学である。当初はディプロマレベルのカレッジであったのが表1の年表に示すようにケニヤッタ大学の一分校としてユニバーシティ・カレッジに昇格したのに伴い、校名をジョモケニヤッタ農工大学(略称 JKUAT)に変更し今日に至っている。農学部、工学部、理学部の3学部から成り、スタッフ及び学士課程学生数は今年3月31日現在表2の通りである。これ迄の供与額は約84.6億円となっている。協力の形態としては、プロジェクト方式技術協力と無償資金協力の2本立てとなっており、前者は専門家派遣、機材供与、研修員受入、ローカルコスト支援で平成9年4月で終結することになっている。後者は講義棟、実験棟、図書館等の建物や水処理施設等への資金協力がその内容となっている。今後の問題としては、プロジェクト方式技術協力が平成9年で打ち切られてしまうと教官確保が困難となるので、延長を含めた対応を日本政府と目下交渉中とのことである。筆者達の短期専門家はこの協力の中に入っており、現地教員の未だ充足されていないところをそれぞれの専門領域にしたがって授業を行ない、更に教員候補者がPh.D.の学位を取得するための研究指導をするのが任務である。ちなみに、学士課程においては、Ph.D.を持っていることが講師になるための必須条件となっている。協力校は京都大学、岡山大学が主班で始まったが、長期且つ巨大プロジェクトに発展したため9月3日現在、日本全国12大学の教授・助教授14名が短期専門家として在籍し、内訳は国立7、公立2、私立3校であった。短期大学からの参加は筆者のみで、他は全員、大学院のある4年制大学の教官であった。更に表2に示すように長期専門家(日本人)が13名在籍している。この人たちの業務は多岐にわたっており、各々所属する学科の短期専門家の世話や、学科の運営に加えて授業まで担当している。青年海外協力隊員を経験して長期専門家になるケースが多いようであった。修士の学位をほとんどの人が持っており、中には博士も複数いた。その他の日本人スタッフとして、チームリーダー、アカデミックアドバイザー、業務調整専門家の計4名の在籍である。

### 大学のおかれている状況

当大学はナイロビ市の北東35Kmの中部州Kiambu郡 Juja町にある。全敷地244haはすべて平坦地で、そのうち144haは農場が占める。わが短大部キャンパスの100倍近い広さである。JKUATに勤務する日本人は大学の近くに適当な宿泊所が無いため、ほぼ全員がナイロビ市内から車で片道40分以上かけて通勤している。滞在3か月以内の短期専門家は自動車の運転は禁止されており、JICAが借りてくれる運転手付きの乗用車に



図3 大学全景(大学案内より)

## ジョモケニヤッタ農工大学

本学は1977年、ケニア政府からの協力要請にもとづいて、日本政府の無償資金協力によって建設されたケニアの国立大学では5番目の一番新しい大学である。当初はディプロマレベルのカレッジであったのが表1の年表に示すようにケニヤッタ大学の一分校としてユニバーシティ・カレッジに昇格したのに伴い、校名をジョモケニヤッタ農工大学(略称 JKUAT)に変更し今日に至っている。農学部、工学部、理学部の3学部から成り、スタッフ及び学士課程学生数は今年3月31日現在表2の通りである。これ迄の供与額は約84.6億円となっている。協力の形態としては、プロジェクト方式技術協力と無償資金協力の2本立てとなっており、前者は専門家派遣、機材供与、研修員受入、ローカルコスト支援で平成9年4月で終結することになっている。後者は講義棟、実験棟、図書館等の建物や水処理施設等への資金協力がその内容となっている。今後の問題としては、プロジェクト方式技術協力が平成9年で打ち切られてしまうと教官確保が困難となるので、延長を含めた対応を日本政府と目下交渉中とのことである。筆者達の短期専門家はこの協力の中に入っており、現地教員の未だ充足されていないところをそれぞれの専門領域にしたがって授業を行ない、更に教員候補者がPh.D.の学位を取得するための研究指導をするのが任務である。ちなみに、学士課程においては、Ph.D.を持っていることが講師になるための必須条件となっている。協力校は京都大学、岡山大学が主班で始まったが、長期且つ巨大プロジェクトに発展したため9月3日現在、日本全国12大学の教授・助教授14名が短期専門家として在籍し、内訳は国立7、公立2、私立3校であった。短期大学からの参加は筆者のみで、他は全員、大学院のある4年制大学の教官であった。更に表2に示すように長期専門家(日本人)が13名在籍している。この人たちの業務は多岐にわたっており、各々所属する学科の短期専門家の世話や、学科の運営に加えて授業まで担当している。青年海外協力隊員を経験して長期専門家になるケースが多いようであった。修士の学位をほとんどの人が持っており、中には博士も複数いた。その他の日本人スタッフとして、チームリーダー、アカデミックアドバイザー、業務調整専門家の計4名の在籍である。

### 大学のおかれている状況

当大学はナイロビ市の北東35Kmの中部州Kiambu郡 Juja町にある。全敷地244haはすべて平坦地で、そのうち144haは農場が占める。わが短大部キャンパスの100倍近い広さである。JKUATに勤務する日本人は大学の近くに適当な宿泊所が無いため、ほぼ全員がナイロビ市内から車で片道40分以上かけて通勤している。滞在3か月以内の短期専門家は自動車の運転は禁止されており、JICAが借りてくれる運転手付きの乗用車に



図3 大学全景(大学案内より)

表1 プロジェクト年表

年	月	主 な 出 来 事
1977	2	ケニア政府からの正式協力要請
1978	10	無償資金協力による建物・施設の着工
1979	7	定礎式（モイ大統領御臨席）
1980	4 10	プロ技協開始（4. 19） 専門家第一陣赴任
1981	1 3 5 6 12	学長の任命（Mr. G.M.Githaiga） 研修員第一陣受入 協力隊第一陣赴任 第一回生入学 機材供与第一陣分到着 無償資金協力による建物・施設完工
1982	3 6	正式開校式典（モイ大統領御臨席） 有田総裁プロジェクト視察
1983	3	皇太子御夫妻プロジェクト視察 大学運営理事会任命
1984	2 4 7	無償資金協力による附属農場建設着工 農学部第一回生卒業式（モイ大統領御臨席） プロジェクト評価調査団受入
1985	2 4 11	附属農場建設完工 延長協力期間開始（4. 19） 第2回卒業式（工学部では第1回、モイ大統領御臨席）
1986	4 11	J K C A T マスタープラン実施に関わる正式協力要請 第3回卒業式（工学部では第2回、モイ大統領御臨席）
1987	8 11	プロジェクト評価調査団受入 第4回卒業式（工学部では第3回、教育大臣御臨席）
1988	4 9 12	延長協力期間開始（4. 19） ケニヤッタ大学の Constituent Collegeへ昇格 新学長任命（Prof. G.S.Eshiwani）
1989	8	J K U C A T 令公示 プロジェクト評価調査団受入
1990	1 3 4 11	J K U C A T 運営理事会任命 3副学長任命 無償資金協力第1期工事開始 J K U C A T オープンデイ（サイトティ副大統領、熊谷大使御臨席） 新プロ技協開始（4. 19） J K U C A T 第1回卒業式（モイ大統領御臨席）
1991	2 7 12	無償資金協力第1期工事完工 無償資金協力第2期工事開始 無償資金協力第3期工事E/N調印 無償資金協力第2期工事完工
1992	1	無償資金協力第3期工事開始
1993	3	無償資金協力第3期工事完工

表2 スタッフ及び学士課程学生数

学部	学科	ケニア人 教官 (UC)	日本人 専門家	学生数/ 1年生	学生数/ 2年生	学生数/ 3年生	就学年数	取得学位
農学部	園芸学	19	2	50	35	41	4年間 3年間	B. Sc. B. Sc.
	農業工学	23	2	33	26	—	5年間	B. Sc.
	食品工学	13	2	24	19	—	4年間	B. Sc.
	小計	55	6	107	119	41		
工学部	土木工学	23	1	21	27	—	5年間	B. Sc.
	建築学	23	2	24	22	—	6年間	B. Arch.
	機械工学	22	1	31	31	—	5年間	B. Sc.
	電気電子工学	19	1	29	31	—	5年間	B. Sc.
	小計	87	5	105	111	—		
農場		4	1	—	—	—		
理学部		80	1	195	230 206	67	4年間 3年間	B. Sc. B. Sc.
合計		222	13	407	666	108		

注1) 他に、アカデミックアドバイザー1名、業務調整専門家1名、業務調整補佐専門家1名計16名。  
注2) 他に、ディプロマコースの学生が618名在籍する。

1～3名が分乗するかたちで移動している。自分で運転できる長期専門家はマイカーを持っているひとが多く、中には複数台所有して用途に応じて使い分けしている人もいた。長期専門家の人はアパート又は一戸建ての家を借りて住んでおり、短期専門家はホテルやホテルに併設された自炊設備付きのアパートメントに滞在している。大体、朝7時半ないし8時に出勤し、夕方5時に下校するのが通常の勤務時間であるが、既述の日本人学校長が襲われる事件があったからは多少の時差出勤が認められた。

当大学の設備について述べる。他学部のことはよく分からないので、筆者の所属した農学部に限定するが、教官の研究ならびに学生実験でよく使う通常の実験機器は一応整備されていた。特殊な測定のための高額機器はまだ無いものも多いが、仮に導入されても限段階では満足な活用は無理なように思われた。教官の育成がまだ途中段階であることと、彼らの授業に関わる時間数が多くてなかなか研究に専念できにくいように見受けられた。また、不意の停電がしょっちゅうあるので大切な試料を分析中に中断される恐れが多分にある。筆者も初めの頃は、ワープロで作成中の講義原稿を何度も停電で消されてしまったので、少し打ってはフロッピーに保存する習慣がついてしまった。研究を進めていくには機器の充実以前のインフラ整備がいかに重要であるかをこちらに来て痛感させられた。日本や欧米で Ph.D. を取って帰って来た教官でも研究活動が低下するケースが多いそうで、この辺の事情も無縁ではないように思われる。

そのような中で、研究活動の活性化に向けた日本人長期専門家の努力は大変なもので、アフリカ全土を対象とした学会を作ることを目標とした研究発表会を毎年企画開催したり、内部的にはセミナーを毎週行っていた。筆者達の短期専門家もこのセミナーに加わって1時間弱の講演を行なった。さて、JKUAT 農学部の施設で特筆すべきは、充実したワークショップを持っていることである。ここは学生の実験・実習で使うだけでなく、いろいろな農畜産物加工品を作って一般向けに販売しており、農産物加工品としてはジャム、ケチャップ、ジュース、パンを、畜産物加工品としてはハム、ソーセージ、ベーコン、ヨーグルト、バター、アイスクリームがあった。筆者もこれらをすべて買って食べてみたが、安いうえに、品質も市販のものと同

様に立派なものであった。原料の多くは付属農場から持ち込まれたもので、学内食堂のパン、ヨーグルト、バター等もこの製品を使っていた。製造には助手やテクニシャンのもとで数名の作業員が当たっていたが、このようなワークショップを持つ大学は筆者は日本では寡聞にして知らず、日本の援助で作られた大学が持っていることに、羨ましいような複雑な気持ちになった。ゆくゆくは更に製造の合理化を図って収益を上げていきたい意向とのことであった。その他、全学的な施設としては、図書館、食堂、ヘルスセンター、学生寮、売店、散髪屋といったものが一応揃っていた。筆者は、講義に必要な本は日本から持参したので、特に図書館を利用しなかったが、蔵書数は3万4千冊とのことで、日本の大学のレベルでみればまだまだ少ないといえる。この中央図書館以外に、農学部では学科別の図書室があるが、これも日本の大学における教官の個人研究室の蔵書並みの規模であった。ケニアに限らず、どこでも図書の充実

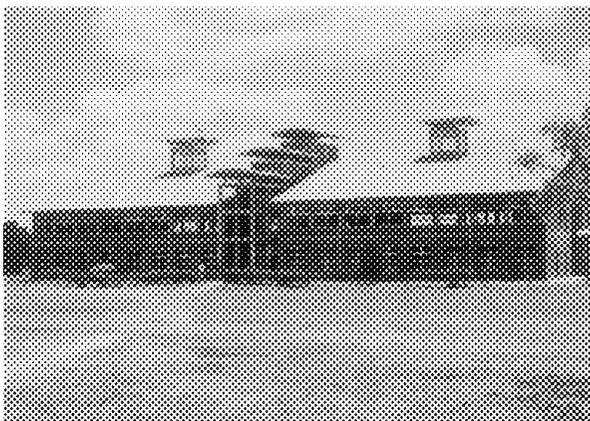


図4 図書館



図5 学食メニューの一例

は建物や機器類の次になってしまうようで、今後の課題であろう。

食堂はここでは Canteen と呼ばれ、職員用と学生用とに分けられている。筆者達専門家は職員用しか利用しなかったが、メニューは同じではないということだった。午前・午後利用できたが、午前中はパンとコーヒー、紅茶程度の簡単なメニューのみであった。ランチタイムは12時半から2時迄であるが、これもメニューは単調で、大体3種類位しかなかった。いずれも一皿もので、ライス、チャパティ、又はとうもろこしの粉を蒸したウガリという現地食に野菜を炒めたものが常にある。これに牛、豚、鶏を料理したものが日替わりでプラスされたもの、ビーフシチューや卵焼きがプラスされるというものである。値段は30~90Ksh と安い。米はパサパサの長粒種のうえ、香り米といって独特の香りがする。現地の人はこの香りをとても好むそうであるが、日本人は苦手という人が多かった。一方、副食の方は、味もよく、日本人が違和感なく食べることのできるものであった。

理髪店は一度だけ行ったが、すんでのところでも丸刈りにされそうになり、そうそうに切り上げてもらって帰って来た。それでも80Ksh は日本と比べると破格の安さであった。郵便物も学内の売店で扱ってくれるので、日本への航空便を出すのに利用した。封書は1通25Ksh で、

これも日本より安かった。本や文房具も売ってはいるが、品数は少ないうえに売り切れのものもあったりで、本当に欲しい物となるとどうしても市内に出て買うということになる。また、JKUATのマーク入りのTシャツやトレーナーも売っていた。最後に学生寮であるが、大学が市内から遠く離れた郊外にあることと地方出身者が多いため、ほとんどの学生が入寮しているとのことであった。大学構内にあり、1室4名で、朝と夕の2食付きとのことであった。

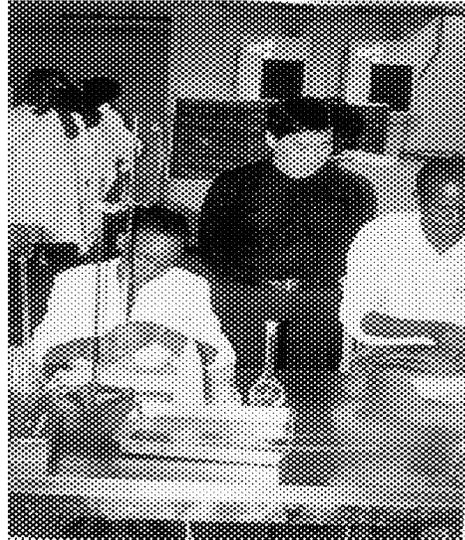


図6 授業風景(中央が筆者)

### 短期専門家の職務

短期専門家の職務内容は、授業担当とカウンターパートとよばれる現地人教官(一般には助手)の研究指導の2つである。通常はこの2通りの職務が課されるが、なかにはカウンターパートの研究指導だけの短期専門家もいた。この担当内容の違いによってナイロビ滞在中の生活状況なり精神状態に大きな違いが出ることとなる。筆者のように授業を持った専門家は講義資料の作成に追われる毎日を送ることになるが、授業のない人は暇で、週末のツアーやサファリの計画は専らこういう人の仕事となった。筆者は「酪農製造学Ⅱ」の講義と実験を担当した。毎週講義2時間、実験3時間を15週の計45時間(実験3時間を1時間とカウント)行なうのがパーフェクトな形態である。しかしながら、滞在3か月以内の短期専門家の場合、この通りの開講は不可能であるため、工夫して最低35時間は開講して欲しい旨の要請であった。それで、与えられた時間枠の中で週4時間の講義と1時間(計数上は3分の1時間)の実験を9週間行なうこととした。こうすることで39時間の確保が可能となった。具体的には木曜日の午前10時から11時迄実験し、その後11時から午後1時迄講義を行ない、金曜日に午前11時から午後1時迄講義を行なった。対象は食品科学・ポストハーベスト学科4年生のうちの食品科学コースの学生であった。20名の学科学生の半数である10名前後と事前に聞いていたが、今年は食品科学17名、ポストハーベスト3名ときわめて片寄ったコース分けがなされていた。長期専門家の言では、非常勤講師として来ている他大学のプロフェッサーが、ポストハーベストを専攻したのでは就職に苦労するという話しをしたせいでと憤慨していた。それでとにかく17名の学生を相手に授業することとなった。講義では牛乳の成分から各種乳製品の製造法を説明し、実験は前半を乳製品製造に、後半を乳成分の分析とした。ヨーグルト、クリーム、バター、チーズに加えて豆乳から作るチーズ様食品である豆腐を製造した。JKUATのワークショップには立派な製造設備があるので、現地スタッフに任せておけば日本人専門家はただ見ているだけで良いと言われていたが、それではわざわざ日本から来た意味もないと考え、筆者はより小型の製造機を日本から持ち込んで授業で使った。この方が大型機械を使うよりも身近かに加工原理が理解してもらえるとの理由からである。いずれも日本での本務校の授業で取り入れている項目であったので、ミスもなく上手に作る事ができた。今回持参した機械・器具の中で、小型のクリームセパレーターは現地のものが故障で修理中だったことと、

短期専門家の職務内容は、授業担当とカウンターパートとよばれる現地人教官(一般には助手)の研究指導の2つである。通常はこの2通りの職務が課されるが、なかにはカウンターパートの研究指導だけの短期専門家もいた。この担当内容の違いによってナイロビ滞在中の生活状況なり精神状態に大きな違いが出ることとなる。筆者のように授業を持った専門家は講義資料の作成に追われる毎日を送ることになるが、授業のない人は暇で、週末のツアーやサファリの計画は専らこういう人の仕事となった。筆者は「酪農製造学Ⅱ」の講義と実験を担当した。毎週講義2時間、実験3時間を15週の計45時間(実験3時間を1時間とカウント)行なうのがパーフェクトな形態である。しかしながら、滞在3か月以内の短期専門家の場合、この通りの開講は不可能であるため、工夫して最低35時間は開講して欲しい旨の要請であった。それで、与えられた時間枠の中で週4時間の講義と1時間(計数上は3分の1時間)の実験を9週間行なうこととした。こうすることで39時間の確保が可能となった。具体的には木曜日の午前10時から11時迄実験し、その後11時から午後1時迄講義を行ない、金曜日に午前11時から午後1時迄講義を行なった。対象は食品科学・ポストハーベスト学科4年生のうちの食品科学コースの学生であった。20名の学科学生の半数である10名前後と事前に聞いていたが、今年は食品科学17名、ポストハーベスト3名ときわめて片寄ったコース分けがなされていた。長期専門家の言では、非常勤講師として来ている他大学のプロフェッサーが、ポストハーベストを専攻したのでは就職に苦労するという話しをしたせいでと憤慨していた。それでとにかく17名の学生を相手に授業することとなった。講義では牛乳の成分から各種乳製品の製造法を説明し、実験は前半を乳製品製造に、後半を乳成分の分析とした。ヨーグルト、クリーム、バター、チーズに加えて豆乳から作るチーズ様食品である豆腐を製造した。JKUATのワークショップには立派な製造設備があるので、現地スタッフに任せておけば日本人専門家はただ見ているだけで良いと言われていたが、それではわざわざ日本から来た意味もないと考え、筆者はより小型の製造機を日本から持ち込んで授業で使った。この方が大型機械を使うよりも身近かに加工原理が理解してもらえるとの理由からである。いずれも日本での本務校の授業で取り入れている項目であったので、ミスもなく上手に作る事ができた。今回持参した機械・器具の中で、小型のクリームセパレーターは現地のものが故障で修理中だったことと、

サイズの農場で搾れる牛乳の量 (20リットル前後) と合い、とても好評であったのは喜ばしいことであった。また、乳製品ではないがチーズ様食品ということで製造した豆腐に学生がどうという反応を示すか楽しみであったが、評判はとても良かった。全員の学生が豆腐という食品を初めて見たようであったが “sweet” と表現して試食していた。副産物のおからも、醤油がないのでケチャップで代用して油で炒めて食べたがとても好評であった。豆乳を凝固させた製品を水の中で型から取り出す方法もずい分珍しく映ったようであった。いずれの製造実験も学生は楽しく取り組んでくれたが、出来上がるのが丁度昼食どきで、空腹時に自分たちがつくったものが食べられることも一因だったかも知れない。実験と比べて講義の方は語学力が障害となつてなかなかの苦業であった。説明が舌足らずの分はなるべく資料配付で補うことにしたが、学生はよく理解してくれたように思う。学生の授業態度はきわめて良好で、席は前の方から埋まって行くし、私語は皆無だった。授業中にどんどん質問してくるし、居眠りする者も見かけなかったし、時折話す冗談にも感度よく反応してくれた。私語と居眠りを見ても叱ることも諦めて本務校で授業していた自分を情なく思いつつ、JKUATでは本当に気分よく授業できた。この点は大衆化された日本の大学全体の問題といえるが、本務校でも改善していくべき事柄である。英語での授業に苦勞はしたが、ケニアで作成したテキストや資料は日本での授業にも取り入れて国際化に役立てていこうと思っている。

学生の成績評価は、出席15点、中間試験15点、最終試験70点の100点満点で行なった。JKUATの場合、40点以上取れば単位認定されることになっており、大学からは平均点が55点位になるような出題要請がされた。中間試験は教官が独自の判断で出来るのだが、最終試験の方はきわめて厳格に行なわれるので驚かされた。まず、問題と解答の原稿を学科長に提出する。学科長はこれを他大学のプロフェッサーに送ってチェック依頼し、返送されて来た原稿に訂正箇所があれば学科長は出題者に訂正の要求をする。筆者の場合は、文章の若干の手直しと配点の変更を勧めるコメントが付いて来た。文章の修正の方は納得できたので言われる通り修正したが、配点の方は無視することにした。この他大学のプロフェッサーによるチェックは相当念の入ったもので、或る短期専門家の場合は原稿を全面的に書き直さなければならないものもあったようである。授業と単位認定のすべてが担当教官に任されている日本の大学との違いが、良い悪いの判断は別にして、見られた。

こうして作られた最終試験の原稿は、全学的な試験室に移されて必要部数印刷される。試験は大学職員が2名立ち会いのもとで行なわれた。丁度、日本の大学の入学試験さながらの光景であった。

試験の採点はすべて担当教官が行ない、成績表を学科長に提出して一件落着となる。日本人の教官は授業に印刷物を豊富に配ってくれて、評価も甘いので学生には評判が良いというのが現地の通説だそうであるが、筆者の担当科目の場合も平均点が74点のハイスコ



図7 卒業式に臨む短期専門家 (右端が筆者)

アであった。

こうして首尾よく所定の単位を取った学生は卒業となるが、一般的には春の時点ですべての単位を取って卒業式は10月から12月の間に行なわれる。学生はその間に就職活動をして行き先を決めることになる。ただ、こちらの企業は先進国からの技術移転で成り立っているものが多いので、大学卒業者への需要が少なく、卒業式の時点で就職が決定している学生は半数程度とのことであった。今年は卒業式が10月6日に挙行され、幸運にも参加することが出来た。大統領も来るというので大学側の準備は大変だったようであるが、多忙なスケジュールを縫っての来学に国を挙げての期待を感じたものである。

### おわりに

筆者には初めてのアフリカであり、それまでに聞いていた情報は大自然が残っているという以外は、治安の悪さとか怖い病気といったネガティブなものばかりで、かなりの不安を抱きながらの赴任であった。現実に着任後も、ケニア日本人学校長襲撃事件があったし、ナイロビ中心街で日本人が襲われた話しも聞いた。これは全体的に治安が良くないということで、特に日本人だけがターゲットにされているということではないようであった。筆者達はとにかく単独では行動しないことに徹していたが、幸いなことに一度も危険な目に会うことはなかった。安全に関するJICA側の配慮もきめ細かく、「ケニア安全対策マニュアル」という40頁の冊子が全員に配付されていることに加えて、9月には職場や宿泊先単位で、緊急連絡用トランシーバーが配備された。大学の設備や授業内容も思っていたよりは充実していたし、学生の態度も真摯であった。しかしながら、気になったのはケニア人教官自らが研究にいそしむ姿が余り見られなかったことである。講師になるには日本や欧米の大学でPh.D.を取って来ることが条件となっているが、これらの教官はケニアに帰ってから研究しなくなると聞かれた。これには本文で述べたインフラの未整備以外にも様々の理由があると考えられるが、担当授業が多すぎて研究に向かうエネルギーが減衰してしまっていることと、大学院が無いことが大きいと感じられた。大学の使命が教育と研究の2つの車輪から成るとすると、研究機能を更に高めていく必要性を痛感した次第である。当プロジェクトは今のところ1997年に終結の予定とのことであるが、日本の無償援助でここまで作った大学を真に実のあるものとするためにももう少しの期間延長を行なって大学院の設置と教官の授業担当の軽減を早急に実現すべきであると考えられた。

最後に、ケニアだけでない治安の改善はとにかく経済が発展して民衆の生活が豊かになることだと感じた。勤労者の平均所得が月1万円以下という人件費の安さは高賃金からくる人員整理という問題に直面している日本人の目から見ると大きな魅力だと思ったし、現に日本企業あたりもアジアの次はインド、その次はアフリカへと目を向けつつあるようで、今後10年、20年先が楽しい地域であろう。

### 参考資料

- 1) JICA 資料 (1995)
- 2) JKUAT (大学案内) (1994)
- 3) 地球の歩き方、ダイヤモンド・ビッグ社 (1994)

